■中国当代文学研究会代表団を迎えて■		釜屋　修

■５月27日（土）12時30分、小塩さんとともに宿舎の後楽園賓館へ代表団を迎えに行く。受付に来意を告げ、陳氏の名を伝えたところ、受付の男性がロビーの一角を指さした。陳駿涛氏が新聞を読んでおられたがすぐ我われに気づいて立ってこられた。ほかでの会合と重なってこちらには参加できなくなった、別途滞在中の社会科学院文学研究所副所長馬良春氏もロビーまでお見えになり、久し振りの再開、10分ばかり立ち話。やがて陳氏（文学研究所副研究員、『文学評論』常務編集委員・編集部主任）、蔣守謙氏（同研究所当代文学研究室副主任）、曽鎮南氏（同研究所同室副主任、『文学評論』編集委員）の三氏に通訳の楊永超氏（社会科学院外事処亜非処）の四氏と地下鉄、田園都市線を利用して駒沢大学に向かう。■車中、陳氏と“自由”論議。日本だってたいした自由があるわけでわない、との小生の不用意な言葉に「世界上没有絶対的自由」と話した氏の一言は痛切だった。小生の研究室ですこし休んでいただく。帰国後発表された一文で、「釜屋修の研究室は広くて、部屋の中には書架何本分もの中国書があった」と描写されたが、私のさして広くはない研究室が「很寛」となるのも、相対性理論であり、旧知の何人もの中国人研究者が語っていた研究条件をも思いあわせて、胸にこたえる。もちろん、会議以外はほとんど自宅で研究できる彼らと、校務その他に忙殺される我われとでは、また別の条件比較も可能ではある。■やがて、わが研究会との交流会のため会場（１号館ＳＦ）へ移動。日本側は、小生以外に、小川利康、加藤三由紀、小塩恵美子、阪本ちづみ、佐藤民人、杉野元子、西野由希子、平石淑子、それに在日中の林芳、王の二氏、また途中から丸山昇氏も駆けつけられた。■これに先立つ５月11日東大山上会館において三十年代文芸研究会との交流も行われた。以下は、この二つの交流会の、きわめて個人的なｍｅｍｏの再現である。文責はすべて小生にある。

■中国当代文学研究会は1980年に創設、会長は馮牧。各省毎ではないが、上海などに分会がある。小さいところでは会員は十数人。『中国当代文学叢刊』や謝冕らの『詩探索』を刊行したが、いずれも財政上の困難のため、停刊。継続発行中の『作品与争鳴』は同会の関係したものであったが、現在は会の手を離れている。また、研究の動きやニュース中心の内部資料『当代文学研究資料与

情報』は会の当代文学研究室の編集。■社会科学院の一部門としての年間予算は6000元。事業収入としては、通信教育、“講習班”などからの収入がある。とてもたりそうにもないとの小生の疑問に、大きな行事には“企業家”のカンパがあるとの回答だった。“年会”は二年に一回、当代文学の重要な問題点を討議し、優れた業績に対する表彰なども行う。

■同会と別に、中国当代文学学会がある。本部は華中師範大学（武漢）で、関係雑誌に『中国当代文学』（広州発行）、国内外の当代文学関係のニュースを中心とする不定期刊の内部資料『中国当代文学通信』がある。総会は年一回、やはり当代文学、新時期文学の問題点をとりあげる。同学会は、詩歌、小説、散文、報告文学などジャンル別の“中国当代文学分史”の仕事を進めている。

■この二つの組織は、性質上ほとんど区別はなく、合併も検討されたが、意見が分かれて実現していない。おおまかに分けて言えば、「研究会」のほうは北方、大学中心なのに対し、「学会」は南方、師範系中心となる。規模は「学会」のほうがやや小さい。

■新時期文学という名称について、誰が最初に言い出したのか、との質問をめぐって団から以下の内容の話があった。1976年ごろ政治的概念として提起され、それを使っていたが、やがて概念が変わり、新しい形態の文学を総括する意味で用いられるようになった。誰が言い出したのかは、気をつけていなかったし、考えたこともない。永遠に用いるというわけにはいかない。88年10月の当代文学学会では“新時期文学応該結束了”という若手の発言があったし、21世紀文学論の立場からは、新時期文学は20世紀まで、という考えもある。いつを起点とするかは論議があった。1976年の天安門詩歌運動、四五運動からとする人、同年10月の四人組逮捕からとする意見、1978年12月の中共三中全会からとする意見、『班主任』出現以降とする考えなどがある。これに関連して、「現代」と「当代」をどこで分けるかも問題になり、香港あたりでは、1949年を分岐点とするのは、政治優先で、文学の発展法則によった分期ではないとする考えがだされている。そうなると、当然ながら、「近代」と「現代」の境界線も問題となる。（以上5/11）

■５月27日は、冒頭で小生が日本の中国当代文学研究会の歴史、現況、これまでにとりあげたきた作家、作品などについて説明した。我われの活動がほとんど手弁当で行われていることに関心があった模様で、帰国後の日本訪問記のなかでそのことに言及された。■1976年以来の文学の大きな変化についての報告があった。“傷痕”文学の時期は、四人組のファッショに対する作家の正義感

の回復、踏みにじられた人間性をとりもどす時代であった。三中全会以降は、リアリズムのさまざまな形での深化の試みがなされる。作家の視点もより巨視的になり、“反思”の姿勢が生まれたり、“意識流”などの手法が追及された。こうした現象、試みは社会の発展と密接に関係している。そして85､86年あるいは更に早い時点から、“多元求索”“多元探索”の時期を迎える。こうした姿勢は本来一つの伝統でもあった。意識流に加えてサンボリズムや西欧現代主義のとりこみがあった。若者たちは表現形式を重視し、自我の表現を尊重した。これは多元化に向かう時代の文学であった。86年以降文学が低落し“沈静化”しているという意見にはあまり賛成できない。86年以降もいい作品、いい作家がないわけではない。けっして80年ごろと同じではない。もっと早い時期の作品、たとえば『班主任』『愛情的位置』など、当時非常な反響があったのは事実だが、今から見れば高くない。あの時代とは違う。■残雪についていえば、（個人としては）排斥はしないが、受け入れられない。劉索拉はまだ理解できる。しかし、彼らの世界は、中国青年の「騒動不安」の心情を反映している。作家それぞれに好みが違うし、過去に喜ばれた作品で今は読む人のない作品もある。多元化の時代だ。■農村を描いた一部の作品、李鋭、鄭義のものなどは、農村の読者もやはり歓迎している。しかし、多くの作品は受け入れられていない。高級なものは読んでもわからない。“通俗性”が必要。趙樹理について言えば、文革以前の成果として、研究しておかねばならない。もちろん限界性はある。■自由はたえず相対的なもので絶対的自由はない。自由が保持されるためには、社会的環境と作家自身の内心の状態と、二つの要素がいる。ある作家は自己の学生時代の運動を描こうとして発表できず、気持ちも萎え、流産してしまったが、彼には大きなショックだった。またある作家は79年に書き上げたものが、88年にようやく出版され、数十万売れ、台湾、香港、アメリカでそれぞれ本となった。社会的環境である。作家の内心について言えば、責任感、正義感、勇敢さを持っていて可能な限り努力する人と、肝っ玉の小さい人がいる。■文芸のコンクール。比較的きちんと行われている。各地から推薦を受けるが、予選段階で 3～400 とか 6～700編。投票は４回行うが、選考委員は一票しか持っていない。選考委員会の構成は、影響力のある人が多く、年令はかなり高い。ただ、バランスも配慮される。韓少功の『爸爸爸』が受賞したとき、外に彼のいい中篇小説があったが、「二つはダメ」という上の見解でこちらは受賞しなかった。これは“技術的”な問題である。当選作の中には、公認されたいい作品もあるし、かと言って当選作が絶対にいい作品と言うわけでもない。方

方の『在大棚車上』などはいい出来栄えだったが、中の一部の若者の会話、ことばが汚くて、受賞に至らなかったというケースもある。■原稿料は“等級”があり、千字あたり15～20元が多いという。ただし、王朔のように映画化が多いと50元にもなるという。■このあと話題は、再び趙樹理、鄭義、残雪、劉索拉、王蒙のことに及び、また作家と企業家との関係など尽きることがなかった。■交流会につづいて夜は駒沢大学駅近くのレストランで会食。名残を惜しんだ。小柄だが、はっきりした物言いで爽やかな、団長格の陳駿涛氏、大柄で温厚、神経痛の足を心気味引いていた蒋守謙氏、才気煥発、エネルギッシュな曾鎮南氏、文学の話にはあまり興味がなさそうで、通訳にたつ機会も少なくて手持ち不足の楊氏、また留学のチャンスをもらえそうと喜んでいた。四人それぞれに忘れ難い印象を残した1989年５月27日の歓談と別離であった。■10月の武漢の当代文学国際シンポジウムでの再開を検討し、東京・大阪から一人ずつ参加しようかと考えていた矢先の８月下旬、シンポ開催中止の伝言が届いた。■記念の写真と思いの丈を陳氏に送ったのが、10月、返信と訪日活動のレポートの載った新聞、雑誌のきりぬきを送って来られたのが11月だった。■陳氏の便りでは、皆さん元気にお変わりないとのこと、何よりである。わが会の皆さん、お世話になった方に宜しくとのことであった。■陳氏の訪日印象記で送られてきたものはつぎのとおり。（コピー・サービス可能）

「与同行晤谈——訪日雑記」　『作家生活報』（沈陽）1989年８月25日
「訪日学術印象」　『上海文論』　1989年第５期（10月）

（1989.11.19記）

人民日报　1989.11.13

中国科学院决定
撤销方励之学部委员称号

本报讯　中国科学院日前决定，撤销方励之的中国科学院学部委员称号。

方励之原是1980年11月由中国科学院数学物理学部选举产生的学部委员。方励之长期坚持资产阶级自由化立场，进行反革命宣传煽动，并已于今年6月经检察部门批准逮捕，现畏罪潜逃，公安机关正在通缉。据此，今年7月26日，中国科学院数学物理学部常务委员会研究认为：方励之的活动已危害了我国的国家利益和我国的科学事业，丧失了继续享有国家在科学技术方面的最高学术荣誉称号的资格，决定由数学物理学部委员采用通讯和无记名投票的方法，对是否撤销方励之的中国科学院学部委员称号问题进行表决。根据表决结果，中国科学院决定撤销其学部委员称号。